

TNC as Teaching Topic in International-Understanding Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/645

国際理解教育における多国籍企業の教材化

——大津和子『一本のバナナから』の元生徒の聞きとりから——

村井 淳 志

TNC as Teaching Topic in International-Understanding Education

Atsushi MURAI

1、大津実践が与えた衝撃—「国際化」の本質＝多国籍企業の教材化

大津和子の『一本のバナナから』(1987年, 国土社)は日本の国際理解教育の歴史の中でも, 内容の緻密さ・教師たちへの影響からみてもっとも重要な実践記録作品と言えるだろう。実践のテーマは日本とフィリピンとの経済格差である。つまり戦前からの歴史的経緯をもつ在日韓国朝鮮人との相互理解教育などとは一応別の文脈に位置づく問題, いわばポスト高度経済成長的な意味での「国際理解」がメインテーマである。国際理解教育は, 教室や学校に外国人が在学する場合(いつそうなるもおかしくはない場合を含む)と, そうではない場合とでは, 教育内容や授業設計がまったく違って来る。前者を狭義の国際理解教育, 後者を広義のそれと定義しておこう。在日韓国朝鮮人やニューカマーズの子どもたちが在籍する学校の教師たちにとっては狭義のそれがまず問題である。教師が着手すべきことは, 教師も生徒ももっている当該国に対するステレオタイプを打破するような, 徹底的な教材研究しかない。作業量は膨大かもしれないが, 道筋ははっきりしている。

しかしここで論じたいのは, 広義の国際理解教育についてである。大津実践も学校にフィリピン人の子どもが在籍していたわけではなく, あくまでも日本の生徒たちの世界認識や国際理解が主眼である。こうした主題が注目を集めるようになった背景は, 高度経済成長期後半以後急激に, 日本とアジア, 日本と第三世界との密

接な結びつきが誰の目にも明らかになってきたことだ。文教当局はこうした変化を「国際化」と呼んでいる。しかし「国際化」も, それに対応した「国際理解教育」も非常にあいまいな用語で, 教育現場においてくるにしたがってはなはだ無原則的に使われる場合が多い。各学校現場では, そもそも「国際化」とはどういう事態を指しているのか, その本質は何か, 教育課程や教育実践は本当に「国際化」に「対応」すべきなのか, もしそうならどのような対応が必要なのか, などをほとんど論じないまま, あたかも錦の御旗の如く「国際化への対応」は当然視されている。大津実践のような典型実践が現れても, それがどのような問題提起なのかが十分共有されず, その意義や残された課題が汲み尽くされてこなかったのではなからうか。

別の機会にも書いたが, 私は「国際化」の本質とは, 企業の多国籍化のことだと考えている。モノ・カネ・ヒトなどと一括して語られることが多いが, モノの国際化＝貿易は昔から行われていたし, 本格的なヒトの交流・相互理解は今後の課題というのだから, 残るのはカネの国際化＝海外投資＝企業の多国籍企業化しかない。今日的な現象としての「国際化」の中核が企業の多国籍化にあることは, 少し考えれば自明であろう。もちろんそれともなって労働移動も増加するだろうが, それは言語や文化のハードルの低い管理的ビジネスマンや知識人と, 文化や言語が労働とは関係のない単純労働者だけで, ほとんどの労働者は特定の言語的文化的

文脈の中でこそその能力を発揮できる人たちである。資本移動の増加と同じような規模で労働移動が起きると想定するのは、まったく現実的ではない。

宮崎義一によれば（『現代資本主義と多国籍企業』1982年、岩波書店）、企業の多国籍化という現象が始まったのは、アメリカでは50年代、ヨーロッパでは60年代、日本では70年代だという。現在でこそ日本には“常に貿易黒字をため込む国”“外貨準備世界一”というイメージが完全に定着したが、60年代前半までの日本の貿易収支は常に赤字で、生産に必要な資本財や原材料輸入の決済を、アメリカからの経済援助（40年代後半）や戦争特需による貿易外収支（50年代前半）などの一時的な黒字でかろうじて補填するという脆弱な構造であった。50年代後半から60年代前半の10年間はようやく、貿易収支が年平均1億ドル台の微々たる黒字に転じたが、好況時にはすぐに赤字に転落するため金融引き締め策がとられて景気後退→赤字収縮という「天井の低い」状態に変わりはなかった。ところが1965年以後、「国際収支の型は一変した」（68年版『経済白書』）。一挙に年平均18億ドル台の貿易黒字を計上するようになり、それによって70年には9億ドル程度の日本からの対外直接投資が可能になった。国際収支構造が途上国型から先進国型へと大きく変化したのである。

とはいえ一ドル＝360円時代には、海外投資に占める製造業の割合は三割程度で、輸入のための資源開発を軸とする鉱業投資とほぼ同水準にあった。金額も徐々に伸びてきたとはいえ、5～9億ドル台で推移していた。ところが1971年に通貨レートが1ドル＝308円と大幅に切り上げられた（ニクソン・ショック）のをきっかけに、日本は72年の「海外投資元年」（宮崎義一）を迎える。この年の日本企業の海外直接投資は、前年比件数でほぼ2倍、金額では2.7倍もの大幅な伸びを示し、一挙に23億ドルに達した。中教審が初めて国際理解教育に関する答申を出したのはこの直後の74年のことである。答

申では「欧米の知識・技術の吸収に急ぐあまり、諸外国に対する総合的な理解や、わが国に対する諸外国の理解を深める努力に欠けていた」という反省が述べられ、そのことが「国民の独善的で閉鎖的な行動を生み、近年における海外活動の拡大にともなって、日本に対する誤解と不信を招いている」という現状分析をしている。ここで言う「誤解と不信」とは、72～74年にアジア各地で頻発した反日系企業暴動、不買運動などを指している。この前後には、バンコクでは訪タイした田中首相が日本商品排斥運動の学生代表と会談を余儀なくされたり（74年1月10日）、インドネシアではジャカルタの反日暴動の責任をとって治安担当大臣が更迭されたり（同年1月28日）、ソウルでは学生が日本大使館に乱入する（同年9月6日）などの深刻な事件が相次いだ。つまり国際理解教育があわてて説かれ始めた理由は「海外活動の拡大」＝企業の多国籍化なのだ。

その後日本企業は、外国為替の変動相場制（73年2月実施）によって円高が進むと北米・ヨーロッパ向け投資を急増させ、78年にはついにアジア向けの投資を上回るほどにまで急増した。日本企業は欧米企業と対等の条件のもとでも競争に耐えられる技術と経営ノウハウを確立したわけだ。この時期に、日本が国民一人当たりのGNPでアメリカやヨーロッパに追いついたことは偶然ではあるまい。そしてさらに八五年のプラザ合意以後、外国為替レートは一挙に一ドル＝180円まで進み、アジア向け・北米／ヨーロッパ向けともに海外投資は激増した。現在（九六年度）、年間海外投資額は700億ドル（九六年の為替レート：1ドル＝112.64円換算による）にも達している。

こうした考察から、国際理解教育についていくつかの論理的帰結が導き出される。

第一に、現在進行している「国際化」は、もっぱら多国籍企業のグローバル・ソーシング（global sourcing＝土地・労働・原材料・市場の調達）、すなわちあくまで生産の投入要素

(input)の面だけであることに注意すべきだ。逆に言えば生産の果実(output)については、国境の壁は低くなっていないどころか、かえって高くなっている場合すらある(先進国の移民制限、先進国と最貧国との経済格差の拡大)。生産のインプットのボーダレス化の著しい進展と、アウトプットにおける停滞ないしは後退という非対称、これが現在進行している「国際化」の内実である。これを前者だけをもって特徴づけることはきわめて一面的である。

第二に、「国際理解教育」をもっとも必要とするのは、当の多国籍企業なのだ、という点である。たとえばシンガポールに支社や子会社を設立しようとする場合、日本が戦時中にシンガポールを3年半にわたって「昭南島」と名づけて占領していたこと、大規模な華人虐殺事件を引き起こしたことを知らない社員を当地に派遣するわけにはいかない。本人が恥をかくだけですめばよいが、ビジネスだつてうまくいくはずがない。だから国際理解教育は企業研修/OJTとしてもっとも切実に取り組まれてきたし、おそらく今後もそうだろう。何よりも学習者の切実さが違う。当たり前のことだが、3ヶ月後にシンガポールに派遣されることが決定済みのビジネスマンと、シンガポールに行ったこともない/近い将来行く予定もない子どもたちとでは、学習モチーフがまったく違う。だからと言って学校で取り組む必要がないなど言うつもりはない。企業に必要であるということは、間接的長期的には、一般の生活者にとっても必要だ。しかし公教育における国際理解教育は、企業が実施する国際理解教育とは視角やスパンを変えて取り組むべきなのは当然である。

第三に、しかし同時に学校における国際理解教育が、企業の多国籍化という、まさに国際理解教育の必要が叫ばれるに至った根源に無関心であるなら、いきおい表面的な異国趣味の展示に終わってしまいがちで、そこには何の学習必然性も、学習における切実さも生じ得ないのでなかろうか。地域に住む外国人をゲストに招

いて民族料理を食べるといった「国際理解」教育が盛んに行われているようだが、エキゾチズムを満足させる機会はいくらでもあり、テレビ番組や観光旅行の屋上屋を重ねるような授業をやっても、子どもたちに何の意味も残せないだろう。私は、公教育における広義の国際理解教育では、私たちがそうした民族による文化や習俗の違いに直面せざるを得なくなった背景である企業の多国籍化という社会変化をこそ主題化すること、つまり「国際化」に「対応」するのではなく、その本質を客観化して学ぶことを提案したい。これは狭義の国際理解教育が緊急である学校でも、それと平行して取り組まれてよい、取り組まれるべき課題であろう。

実は、私が大津実践を国際理解教育の典型と考えたのは、こうした多国籍企業の活動がそのメイン・テーマだったからだ(大津が取りあげたのは、日本の多国籍企業ではなくアメリカのアグリ・ビジネスだが)。多くの教師たちが大津実践に衝撃を受けた秘密も、そこにこそあったのではないだろうか。大津実践は身近な商品であるバナナの生産過程を詳細に明らかにしたと言われるが、もしフィリピンの民族資本が生産・輸出している商品を取りあげた場合、描写される労働過程が過酷であったとしても、それは以前から存在していた関係であり、あれほど衝撃をもって受けとめられなかったたのではないか。何ととっても、多国籍企業の活動と現地農民との葛藤、そしてそれを私たちが食べているという三角構造にこそドラマ性があったのである。

次節以後では、こうした意味での国際理解教育の典型実践としての『一本のバナナから』がどのようにして生まれ、かつそれは生徒たちにどのような意味を残したのかを、大津本人と、元生徒たちからの聞き取り調査に基づいて検討していきたい。

2. 大津実践の背景にあるもの①——生徒志向の徹底した授業づくり研究

まず大津和子本人に、『バナナ』に至る実践のあゆみ、『バナナ』を構想したモチーフをうかがった(98年2月16日,神戸市内でインタビュー)。大津は自身の論文には,実践のあゆみやモチーフをほとんど記していないので,この点はかなりくわしくうかがったし,またていねいに紹介しておきたい。

そしてさらに大津に,『バナナ』の授業開始以後で,年齢がおおむね30歳以上で,連絡先を大津本人が把握している元生徒をできるだけ紹介して下さいと依頼した。その結果,次の六名の元生徒をご紹介いただき,全員から直接お話をうかがうことができた。

M.Yさん(女性),30歳。主婦,2歳の女児の母親。大阪市在住。

Y.Mさん(女性),30歳。航空会社勤務。大阪市在住。

K.Aさん(女性),30歳。測定機器メーカー勤務。京都市在住。

T.Yさん(女性),29歳。カメラマン。芦屋市在住。

N.Kさん(女性),29歳。主婦。4人のお子さんの母親。松山市在住。

M.Tさん(女性),22歳。看護婦。東京在住。

最後のM.Tさんの場合は「おおむね30歳以上」という当初の条件とは異なるが,きわめて個性的な生き方をしているらしいということで,特にお願いしてインタビューさせていただいた。(98年3~4月に,N.Kさんを除く5名に面接インタビュー,N.Kさんのみ電話インタビュー,M.YさんとY.Mさんは同時取材,あとの方は個別取材)

こうしたインタビューから,『バナナ』を準備し開花させた要素として,次のような側面を指摘できると感じた。第一に,生徒を志向した徹底した授業づくりへのこだわり,第二に在日朝鮮人生徒や被差別部落出身の生徒の教育の経験,第三に個々の生徒に対する手厚いケアリン

グ,である。順次検討していこう。

第一に,生徒志向の授業づくりについて。この点について大津は次のように語って下さった。大津が教師として最初に着任したのは兵庫県立I高校であった。

「I高は総合選抜で,輪切りじゃないんですね。上部5%を除いて,地域の中学校からほとんどの子が来るんです。だから教室には国立大学に行くような子もいるし,50分間座ってられない子もいました。学校間格差をなくそうとして60年代末から総合選抜が新しく導入されたんですけど,それがよかったのか悪かったのかは非常に大きな問題です。京都なんかも同じ問題を抱えています。阪神間は部落解放運動が非常に力をもってまして,差別に敏感な地域だったから導入されたんですね。私はそこでずいぶん鍛えられたと思います。だって,ええかげんな授業してたら全然こっち向いてくれないし,ぶいっと出ていってしまうのね(笑)。“うーん,どうやったらあの子たちをこっち向かせられるんやろう”っていう思いがいつもありました。

それとその学校は新設2年目で,校則も制服もなかったんです。そういう新しい学校を創っていく中に加わったんです。若い人が多くて,同世代の人たち何人かで,当時から授業研究やってきました。すごく仲間に恵まれてました。“やっぱり授業で生徒にこっち向いてもらわんならん,教師の一番大切な仕事は授業やね”って思っていました。“生徒が一番長く時間過ごすのは授業なのに,いい授業ができなくて何が生徒指導なのよ”って,今でも学生に言うてるんです。当時はまだビデオなんてまだあんまりなかったんですが,テレコを授業に持っていったのは録音して,合宿して批判し合ったり。藤岡信勝氏が教科研の授業づくり部会でストップモーションなんてやってたでしょう? 実はあれをね,私たちはすでにやってたんですよ,仲間で。そこでずいぶん勉強になりましたね。そりゃ失敗することは多かったですけど,うまく行く

と、やっぱり生徒たちが違うんですね。」

— 確かにあの快感を1回知ってしまうと…。

「ねー、そうでしょう！ 生徒がおもしろいって言うてくれたら、すごいやり甲斐ありますよね。そういう意味では私は、それを知ってしまったんですね、早い時期に。授業がおもしろいし大事だしいつのがずっとありましたね。たとえば当時、ゲストを呼ぶのはすごく大変で、校長は“共産党の人間がきたらどないすんねん！”(笑)。だから私はあれやこれやと策を立てて。学内で私はある時期、“私の授業はいつでも見に来て下さい”って言うてましたから、教育委員会から主事が来たときには校長先生も一緒について来てはって、主事が授業を見て、すごいおもしろいって言うてくれたら、校長も“そうかな”と思わざるを得ない(笑)ようにするとかね。で、結局フリーパスみたいになって、私はずいぶん、自由に人を呼べるようになったんです。一人がそういうふうになると、他の人もしやすくなるわけですね。

フィリピン人やタイ人と、たった一時間だけでも直接コミュニケーションできるっていうことは、大多数の子たちはすごいインパクトを受けるわけですね。たとえば私がNGOに招かれて講演に行くとね、そこに“やあ先生！”って卒業生が来てたりするわけ。“あのときフィリピン人が来て…”とかよく覚えていました。ごく少数だけでも、その子たちが何かインパクトを受けたとすれば、すごくうれしい。全員がそんなふうになるとは決して思わないし、それはいいことでもない。でもそういう手応えが確かにあれば、それが教育だと思うんですね。だからそれはやっぱり授業のちからなんじゃないですか。」

— 先ほどチラッとおっしゃられた、いつでも授業に来て下さいっていうのはいいですね。ふつう、なかなかそこが踏み切れないでしょう。

「苦しいですよ。私だっていつもいい授業してるかっていうとそんなことはないわけだね、受験も片っぱにあるので、しょうもない授業も

してるわけですね。」

— そこをお互いに認め合っで見せ合えれば、かなり違ってくる…。

「と、思いますね。でも難しいですね。だから私がそういったおかげで、周りの人はずいぶん迷惑を被ったと思いますよ。私の同僚はやりにくかったかもしれません。あるとき学年のはじめに、テストはバラバラにしましょうって言いました。『現代社会』を4人でやってたんですけど、“バラバラにしようね、テストしなくてもいいことにしようね”って。共通のテストになると、テストのための授業になっちゃうから、それはやっぱりよくない。たとえば私はテストは、中間なしで期末だけとかね。担当者によってバラバラなんですね、平均点も違うし。それで“『現代社会』は成績の順位のためのデータには入れないで下さい”って言いました。そうすると“社会科は何で順位に入れへんねん”って学年からプレッシャーかかります。だけどやっぱり授業を守るためには、そうせざるを得ない。そういう軋轢はいつもありましたね。それでも一人一人の教師が“私はこういう授業をしています。だから見に来て下さい。どこが足りないでしょうか”と言って、悪かったらそれは改めればいい。オープンにしていれば、なんでテストのための授業をしなくちゃいけないんですかと、少なくとも議論ができると思うんです。オープンにしなければ議論しても議論にならない。そういう意味で私は、授業にこだわってきましたね。でも実際は、二つめの学校ではごく限られた時期に限られた同僚が見に来てくれただけですが。」

インタビューの中でも述べたが、授業を相互に見せ合うこと、「いつでも私の授業を見に来て下さい、批判して下さい」という姿勢が決定的だと私も考えている。ここで踏み切らず「よそ行き」の授業だけを公開したり、うまくいった数少ない事例だけをレポートする形式の授業

研究は、当の教師たちが注いだエネルギーに比して、学習の改善に資するところは少ない。むしろ、日常の硬直的な授業の隠れ蓑に使われるケースさえあるかもしれない。そういう意味では授業の常時公開に早い時期から踏み切っていた点で大津は、一般の「授業研究に熱心な教師」とはまったく違った地平に進んでいたと言える。

3、大津実践の背景にあるもの②—在日韓国朝鮮人の生徒たちの教育に取り組む中で、異質との出会いの楽しさに目覚める

『バナナ』はフィリピンが舞台であり、前章で述べたようにポスト高度成長的な国際理解教育の典型実践だが、大津の実践のあゆみにおいては、日本における最大の在日外国人集団である韓国・朝鮮人の子どもたちの教育への積極的なかわりがあった。私自身も『バナナ』実践がそうした教育運動の歴史と無関係に生み出されたわけではないことは予想していた。大津本人はこの経緯についても、これまで論文では触れてこなかったが、今回のインタビューでやはりくわしくうかがうことができた。

「私とアジアとのかかわりが出てきたのは、教師になってからなんです。校区には在日の生徒が多かったんです。担任をしているとたいいていクラスにいます。当時ですから通名を名乗って、親しい友だちにも自分が在日だということは言わない。教師にも分かる場合と分からない場合があるんです。中学校からの書類に本名が書いてあるとわかるんです。私は、部落の生徒や在日の生徒については、まず本人とゆっくり話をして、本人がどういう気持ちでいるのか、どういう状況でいるのかっていうことを聞いて、そして“家庭訪問してもいい？ 家族にも会いたいんだけど”っていうふうに切り出しました。

今でもすごく印象に残っているのは、Pさんという子で、彼女もやっぱり日本名で来ていた

んですね。当時、彼女の家には一世のじいちゃん、ばあちゃんがいて、ほとんど朝鮮語を話している。お母さんは二世で両方話せて、彼女は三世で日本の学校行って、ほとんど日本人と変わらないわけですね。だから家に二つの文化があるんですよ。お母さんはご飯つくるときに二種類つくっているんですね。それで家庭訪問したときに見ていると、彼女はじいちゃん、ばあちゃんとあんまりコミュニケーションしてないんですね。たとえば、じいちゃんやばあちゃんが“そのスッカラ(スプーン)とって”って言うんです。そんなふうに、彼女は言葉は接しているんですが、自分でその言葉を学ぼうという気持ちはないみたいだったし、二つの文化をもっているっていうこと、自分の家族の文化を非常にネガティブにとらえている。そういう時代だったからだと思います。今とは違いますからね。それは私にとってはすごい残念だっていう気がしました。

でも私は日本人だし、彼女に何か言えるかっていうと、それはちょっとどうなんだろうなあっていう気がして。でもそのじいちゃん・ばあちゃんと話せたらいいなあって思ったんですね。韓国・朝鮮の文化について知らなかったし、違う文化があるっていうことに興味を持ちましたから。うーん、どうしようかなあと思って、それで朝鮮語を習いに行き始めたんです。神戸学生青年センターっていう所が朝鮮語講座を開いて二年目だったかな、今では信じられないぐらい普及していますけど、当時は朝鮮語なんてテキストもなかったし、教える人もほんとに在日の人しかいなかったんです。私はそこに夜、通い始めたんですね。初級の、ハングルのアルファベットからやり始めて。私にとって、すごくおもしろい世界でした。先生も在日の、私よりちょっと年下の、すごくステキな女性でしたけど、そこで出会った何人かの在日の人たちとは今も時々やりとりがあります。それから韓国に2~3回行きましたね。文化に出会うこともおもしろかったし、『現代社会』が始

まって、世界の文化を理解することが大事だっ
ていうことで、教科書にほんの少しく文化>
という単元が出てました。私は自分の授業を創り
たいと思って、それから台湾、中国、フィリピン、
インド、スリランカなどアジアにしょっちゅう
出かけるようになったんです。」

さらに大津は、こうした在日韓国・朝鮮人の
子どもたちの教育実践のあゆみを踏まえな
い人権教育・国際理解教育をきびしく批判して
いる。

「関西には在日の問題や部落の問題があっ
て、しかも私が教師になりたての頃は同和教育
が非常に盛んな時期で、私もまたそれにコミッ
トしてました。多くの教師たちが右往左往しな
がらも目の前にいる生徒たちに懸命にかかわろ
うとしていた。大げさにいえば、人間としての
生き方をともに模索していたんですね。でも教
室の中の同和教育や人権教育は熱意ばかりが先
に立って、生徒自身が気づき、考え、自己を見
つめなおしていくというプロセスを大事にする
方法が十分には自覚されていなかった。いわば
内容が先行し、方法は重視されていなかったん
です。最近逆に、海外から輸入された数々の
アクティビティが重宝がられて一人歩きして
いる観が一部にあります。すでに大阪ではすぐ
れた実践が出てきていますが、これからの人権
教育はこれまでの同和教育の実践の成果を生か
しながら、生徒の学びのプロセスを大事にし
る様々な方法が必要とされていると思います。」

4. 大津実践の背景にあるもの③—個々の生徒 に対する手厚いケアリング

三つ目の要素として、個々の生徒に対する手
厚いケアリング的な対応があげられる。これに
ついては大津の論文では触れられてこなかった
が、元生徒たちへのインタビューで、多くの方
がもっとも語って下さったのはこの側面であ
る。まず大津自身の発言を紹介する。

「教師になった頃は仕事がおもしろかった
し、けっこう忙しかったですね。いろんな問題
抱えた子がいましたね。貧しい子もいたし、妊
娠して中絶した子もいたし、担任してた女の
子に“先生、つわりって知ってるか”とか言わ
れて“何それ！”って(笑)、いろいろ教えてもら
いました。私はその時分、まだ自分の子どもが
生まれる前だったから、生徒とも存分につきあ
って、家に泊めたりとか、しょっちゅう生徒と
行き来してましたし、一日須磨の海岸に自殺未
遂の子と、何も話さないで座ってたりしてたこ
ともあります。登校拒否の子を毎日のように迎
えに行ったりしたことも。それがよかったか悪
かったかは今から考えると問題ですけど、当時
としては、いい悪いは別にして、まあ熱意のあ
る教師だったと思います。」

聞き取りをした中で、高校生活において、あ
る意味では危機的な時期を体験した方がおら
れる。T.YさんとN.Kさんである。彼女たちは
今でも大津が自身の危機について親身に相談
にのってくれたことを深く感謝しており、そ
うしたかわりゆえに現在も連絡をとり続けて
いる。まずT.Kさんのお話を紹介しよう。

「高校時代、私はひどく調子が悪かったん
です。家庭的な事情で、中三の12月に神戸に引
越してきたんですが、私は元の場所では進学す
る高校が決まっていたので、受験勉強なんて全
然してなかったんです。12月から勉強して、
それでもかなりランクが上の高校を受験でき
るところまで成績も上がったんですけど、神戸
の受験制度っていうのは、3年間かけて一番上
の高校を受ける人は誰っていうふうに振り分け
が済んでしまっていたんですね。それで12月
に来ていきなり上の高校を受けてもらっては困
る、二つくらいランクを落としてくれて担任
に言われたんです。それで私にとっては、高校
生活はかなりつらい3年間だったんです。勉強

の面でも自分のライバルになるような人もいないし、考え方の面でも共有し合えるような人にも出会えず、いろんな意味でしんどかったんです。

H高校っていうのは当時は決してよい学校ではなかったんです。生徒もやる気がなかったし、教師もやる気がなくて。本当に最悪です。廃校したら？って言いたくなるくらい。駅からバスに乗るんですが、バスに乗れないと、海沿いで風がビュービューふいて、工場の臭いのする路を30分歩かなくてははいけないんです。みんなそれが嫌でバスに乗ろうとするんですが、数本しかないので満員で乗れないんですよ。乗れないと遅刻になるでしょう。乗れないと分かった時点で生徒はズラズラ家へ帰って行くっていうのが毎日起るんですよ。教師も本当にやる気のない先生ばかり。私たちの間では、H高校に来る先生っていうのは県の中でも回された先生っていうふうに言われていたんです。だから先生に対して何の信頼もなかったんです。その中で大津先生は本当に例外だなんて子ども心にも思っていました。男の先生から“大津女史、大津女史”って呼ばれてたんですよ（笑）。それだけ一目置かれてたんでしょうね。

大津先生が、入学したときにすぐ、“あなたみたいな人が何でこの高校に来たの？”と、まずポンと言われて、それがすごく印象的だったんです。“あ、この人は私のことを分かっているな”って。だけど私、そのままどんどん勉強する気がしなくなって、学校も行かなくなって、行きたい進路も見失ってしまっただけで、ちょっと精神的にも悪くなってしまったんです。こうなってしまったのは自分のせいじゃないっていう気持ちを引かずっていたんですね。私自身に問題があるんじゃない、絶対何かがおかしいというふうに自分勝手に考えていたんですね。そういう時に大津先生は“あなたは大学に行くべき人だから”って強く勧めて下さったんです。でも私は、その時はまだ家庭の事情を引かずって“お金がないから”って言ったら、大津

先生は“貸してあげるから行きなさい”とまでおっしゃったんです。それがすごく印象的でした。担任じゃないときでも、“あなた、今、何しているの？”ってよく言われたんですよ。それは“あなた、自分をよく分かっているの？”という意味の“何しているの”だと思うんですけど、そういうのが残っているんです。

それで卒業してからやっぱり大学行こうと思いまして、受験勉強をやりだして進学して、今に至っているんです。だから私にとっての大津先生っていうのは、バナナの授業よりもそういう部分なんです。いつもきっちり核心を突かれている感じがしていました。」

次は N.K さんのお話である。

「実は私、高校3年生の時に子どもができて、退学したんです。子どもができたとわかった時点で、退学して結婚・出産しようと決めました。母も賛成してくれました。それで担任の先生に、退学しますと言いに行っただけです。でも理由は言いませんでした。だから先生は、どうして？とか、もう少しで卒業だからがんばったら？とか、そんなふうにおっしゃっていましたが、私は“いえ、退学します”としか言いませんでした。

それで家に帰ろうとしていたら、学校の廊下で、2年生の時の担任だった大津先生に偶然会ったんです。私、ちょっと迷ったんですけど、その時なぜか、大津先生にはお話ししておこうかなと思ったんですね。それで事情を全部お話ししたら、“それはおめでとー！”っておっしゃったんですよ。それから子どもが産まれた時にお知らせしたら、お祝いに『育児百科』をいただきました。最初の育児って誰でも緊張するものだと思いますが、その本は肩の力を抜いてくれるような、もっと楽に子育てしなさいというようなアドバイスがたくさん書いてある本で、とても助かりました。

私はその子の父親と結婚したんですが、離婚

して、それから今の夫と再婚して、3人子どもが産まれました。その時産まれた子どもは11歳になりましたが、大津先生には子どもの成長を見てもらいたくて、写真の年賀状を毎年出してきたんです。」

『一本のバナナから』の背後にはこうした生徒と教師の間の、生活という文脈を通じた接触があり、その要所所で大津は、的確で印象的なサジェッションを行っている。

5、生徒たちは『バナナ』の授業をどのように受けとめたか—①M.T.さんの場合

以上のような前提の下、メインテーマである国際理解や開発について、元生徒たちが大津の授業をどのように受けとめたのか、またこの問題について現在、どのような考え方をしているかを紹介していきたい。

まずこうしたテーマをもっともご自分の生き方と重ねておられるのが、M.T.さんであった。先に述べたように、私の聞き取り調査は30歳前後より年長の方を対象を限定してきた。それは職業の選択とパートナーの選択（職業やパートナーをもたないという選択も含む）という人の生活における最も重要な選択をほぼ終了した人による教育体験の想起と意味づけのプロセスこそが最も重要だと考えるからである。M.T.さんはまだそうした選択の最初の段階にある。が、その点を割り引いたとしても、彼女が語る20歳代の職業計画は、大津実践との関係でかなり興味深いものであり、かつ高校卒業から現在に至るまでの彼女のあゆみは、そうした計画に一步一步着実に実現に近づいてくるものであった。

M.T.さんは大津がH高校で教えた最後の学年の生徒の一人で、M.T.さんが1年生の時に大津が「現代社会」担当の教師だった（翌年、大津は北海道に転出）。M.T.さんは1年生の時、大津が顧問をしていたボランティア委員会に参加し、やはり大津に勧められて神戸元町商

店街の一角にあるPHD (Peace, Health & human Development) というNGOの事務所を訪れメンバーになった。そして高校在学中に2度、PHDのスタディツアーで東南アジアの村に滞在する。PHDは、開発途上国の村から若い農民や女性を日本に招き、職業指導や公衆衛生活動などの研修を受ける機会を提供する一方、研修生と日本人学生との交流事業に取り組んできた。スタディツアーは、帰国した元研修生の村にホームステイさせていただきながら、途上国の実状や生活に触れる体験を組織するものだ。M.T.さんはタイとインドネシアを訪れた。高校1年生最後の春休みに行ったタイでは、北部山岳地帯のカレン族の村に滞在した。カレン族は当時、タイ政府軍と内戦状態(!)であったという。

この滞在体験に深く感動したM.T.さんは、看護婦として途上国で働きたいという夢をもつようになった。数学が苦手だったM.T.さんにとって看護学校の門は難関だったそうだが、数多く受験した中で岩手県にある看護学校に合格することができた。そして神戸を離れ、単身、岩手の看護学校に入学。看護学校に入学したあともPHDのメンバーとして活動を続けながら3年間の課程を終え、無事卒業。看護学校の教官の強い推薦があって、昨年(1997年)春から東京築地の聖路加病院に勤務している。そしてそこで実務経験を積んだあとは、アフリカで看護婦としてボランティア活動に従事するつもりだという。

M.T.「いろんなところにいってみたいと思います。アフリカだけじゃなくて、ヨーロッパにも。でもそうそう行かれるわけじゃないから、何か技術があったらいいんじゃないかなと思って看護婦になったんです。医療だったらどこに行っても必要ですから。」

— アフリカへ行くときには青年海外協力隊に応募されるんですか。

M.T.「うーん。青年海外協力隊で行くとき

は、やっぱり日本国の派遣員として行くから、良し悪しって言うことがあるみたいで…。だから全然アテはないんですけど、NGOで行けたらいいなと思っています。だからもっと勉強して、〈国境なき医師団〉で行きたいなあって思ってます。語学ができないとダメなんです。英語かフランス語が堪能であることっていうのが条件らしいんです。私、全然できないんですよ。母はフランス語が少ししゃべれるんですけどね。3年間ほど向こうにいたもんですから。」

このようなユニークな生き方を選択しようとしている M.T さんの素地は家庭で培われた。お父さんはフランス料理店のシェフで、ご両親ともフランス在住経験がある。またお母さんの家庭での教育方針もきわめてユニークで、たとえば月1回、粗食で過ごす日というのを設け、その日はご飯と味噌汁だけで過ごしたそうである。お母さんは M.T さんが小さい頃から毎年8月6日には原爆を扱った童話の読み聞かせを続けていたという。だから M.T さんは小学校低学年の頃から『はだしのゲン』の愛読者だったそうだ。

大津の国際理解教育の実践が新聞紙上で紹介されているのを見たお母さんは、M.T さんに、“こんないい先生にあたるなんて、本当に幸運なんだから、大津先生の授業はしっかり聞きなさい”とアドバイスしてくれたという。こうして大津と出会い、M.T さんの視野は一気に世界へと広がった。

「大津先生が、これからは日本人とか何とか人じゃなくて、地球市民としての教育とか見方を身に付けなさいといけないうんだ、地球に住んでいる人間として、そういうレベルで物事を見ていかないと、日本だけ贅沢できればいいという時代ではなくなったんだということを、先生が言ったときに、“すごいな”と思いました。地球市民なんて、そんなスケールの大きいこと、普通は考えもしないし、私もそういう意味では

小さいことしか考えていなかったもので、すごく感動しました。

大津先生はすごく PHD を勧めてくれたんです。PHD でカレン族のところに行って人生が変わったと思います。本当に変わったんです。PHD の人には今もよくしていただいて。看学時代にはカレン族の女性で作った草木染を売ったりしたんですよ。向こうではもう草木染には需要がないんですよ。化学染料の方が色は鮮やかにできるし、ああいうものがいいっていう感覚がないから全然売れない。でも日本だったらナチュラル志向で、逆に高く売れるんですね。PHD で日本に研修生としてきた人が村に帰って活動しているのを見て、その奥さんが、女の人にも何か村興しというか女性の自立のために役に立つことをと考えたのが草木染の布を作ることなんです。そんなふうに、今でも PHD とは交流があって、かわいがってもらっています。年上の人たちとも知り合えて世界が広がりましたね。観光旅行ではそういうところにホームステイなんて、絶対にできないじゃないですか。」

M.T さんに大津の授業についてうかがったところ、一番印象に残っているのは、バナナの授業ではなく、貿易ゲーム*であるとおっしゃった。

*大津の著書『国際理解教育』62頁以下を参照のこと。クラスを12の班に分け、4つの先進国グループ、4つの中進国グループ、4つの低開発国グループに分かれ、制限時間内に各グループに渡された道具（ハサミ、定規、鉛筆など）と紙で指定された製品（半径〇センチの円形、タテ〇センチヨコ〇センチの長方形など）を作成し、いくら儲けたかを競うゲーム。ただし先進国には必要なすべての道具があり、低開発国には紙しか入っていないなど、条件には大きな格差が付けられる。途上国がおかれた状態をモデル化して実感することが目的。もともとの開発者はイギリスのアン・ウィルキンソン。

— バナナの授業は覚えていらっしやいます

か？

「近くに大きな卸売り市場があったんですよ。そこで先生が、ポケットマネーで山のようにバナナを段ボールいっぱい買ってきて、授業の時に全員に配って、みんなでバナナをむしゃむしゃ食べているっていう（笑）すごく変な光景はよく覚えています。その前に貿易ゲームをやったんですよ。私の班、何もなかったんですよ。紙だけで。ハサミもなければ鉛筆もない、これで何を作れっていうの（笑）っていう状況で。そういうことをやってから、最後に南北問題と絡めてバナナの授業もやったんだと思います。

ー 貿易ゲームの方が印象に残っていますか？

「みんなムキになってやりましたから。バナナの授業ってけっこう古いですね。あの頃はもう、いろいろ新しいことをやっておられたんで、バナナはメインじゃなかったんです。付属みたいな感じで、こういうこともありますっていう程度だったんじゃないかな。

大津先生は貿易ゲームを2回やらして、1回目すごい貧しい国にやられた人間は、次はアメリカとか日本になるんですよ。私、1回目はブータンだったか、何にもない貧しい国になって、先進国グループの人がすごい意地悪で何も貸してくれないし、紙五枚とハサミ10分の交換とか、すごいアコギなことをするんですね。なんて奴等だと思ったんですけど、次に自分が逆の立場になったら同じことするんですね（笑）。2回やってどうだったかっていうことを訊くと、みんな“やっぱり、ひどいなあ”って思ったとか、自分がその立場になったらやっぱりやったとか、何かそういうおもしろい発言がありました。とにかく素直におもしろかったですね。単純に、こんなに差があるのかっていうことを実感しました。片やハサミもあれば紙もある、定規もある国がある。片や鉛筆一本と紙10枚とか、そういう身近なものに置き換えられると歴然としたというか、それがすごい印象に残

ったですね。数字で言われても分からないじゃないですか。自分はこんなに豊かな国に生まれたのかって言うことを実感させてくれましたね。」

6、生徒たちは『バナナ』の授業をどのように受けとめたかー②M・Yさん、Y.Mさん、T.Yさん、K.Aさんの場合

次にM.YさんとY.Mさんのお話を紹介したい。お二人もバナナの授業自体はよく覚えているが、より印象深いのは死刑廃止についての討論だったと述べていた。

M.Y「バナナの授業は、最初にバナナを食べたっていうのがすごい印象的やったね。授業中にバナナ？やったー！って。若いからお腹すいとるし。すごい覚えている。最初は何でかなと思っていたら、やっぱり社会科の授業やった（笑）。」

Y.M「難しい話はあんまり覚えていないんですが、4つの会社しかないとか、バナナのシールを集めたり、バナナボだけがみつからなくて、そうなんや…と思ったり。」

M.Y「うちのお母さんにこの前聞いたんやけど、『大津先生のバナナの授業しとったときにはあんた、家でもバナナの話、よくしとったよ』って。そうやったんやって（笑）。」

ー やっぱり日本とフィリピンの生活格差とか、インパクトがありましたか？

Y.M「そのへんは何となく覚えていますけど、南北問題とかはあんまり記憶にないかもしれない…。先生の授業では、バナナの授業より、私は死刑の授業の方が印象あるかな。」

M.Y「うん私も。」

Y.M「一番最初に、死刑あった方がいいか、ない方がいいかっていうのをまずやって、それから死刑についていろいろ勉強して行って、また一番最後にどっちがいいか、もう一遍聞くんですよ。けっこうみんな、最初とは意見が違っ

たり、分かれたり。私も最初は『あった方がいい』だったんですが、授業が終わったら『ない方がいい』に変わったんです。昔は冤罪がすごくたくさんあったんですよね。免田事件でしたっけ？ そういう事例をいろいろ教えてもらって。」

M.Y 「あれはみんな白熱したよね。私は変わらなかったよ。最後は『ない方がいい』が断然多かったから、おかしいと思ってましたね。」

Y.M 「絞首刑が実際どんななるとかっていう話も教えてもらわへんかった？ すぐに死なないこととか。」

M.Y 「死刑囚の手紙とかも読んだような気がする。でも私は、とにかく絶対あった方がいいはずやって思ってて、いろいろ見せられても変わらへんかったわ。でも大人になって、今は、どっちかっていうとない方がいいかなあっていう気持ちですね。」

— ない方がいいってというのは、死刑を執行しなければならぬような事件がない方がいいってことですか、それとも死刑制度がない方がいいということですか。

M.Y 「うーん、どうかなあ。そこまで深くは考えたことがないけど…。でも死んで償えるものではないというのは、すごく思うし…。でも逆に麻原みたいな人は“死刑じゃ！”(笑)とか思うし。」

Y.M 「もし、自分の肉親とか殺されたら死刑にしてやって思うかもしれんけど、死んでそれで終わるわけじゃないから、それやったら一生償え！と思います。」

M.Y 「うん、無期懲役にして、刑務所で一生反省しなさいって。」

— でも無期懲役って、服役態度がよければ15～16年ぐらいで出所するんですよ。」

M.Y/Y.M 「えっ！そうなんですか？」

M.Y 「そんなん、無期懲役やないじゃない。でももしそれで、自分のやったことが分かっ

て、その罪を一生背負って生きていってくれるんやったら…とも思いますけど。とにかく反省していない人をちゃんと閉じ込めておけるんやったら、死刑はいらないかな。」

お話によれば大津が出した資料はおおむね、死刑廃止論を支持するサイドに限定されていたようだが、それでも授業にはM.Yさんのようにそうではない判断を下せる幅があり、そうした判断の幅を行きつ戻りつした経験が特に印象に残っていたようだ。

次に先に大津のケアリングの力量を高く評価していたT.Yさんの授業についての印象を紹介してみよう。

— バナナの授業はおぼえていらっしやいますか。

T.Y 「それは覚えていますね。いきなり教科書も何も使わず…。担任の先生でしたし、けっこうきびしかったですしね。ぼーっとする時間を与えない授業でした。それだけでも印象に残りますね。ただ高校1年生ってというのは、世界といってもまだよく分からないんです。なぜいきなりフィリピンなのかっていうのがやっぱりありますよね。そういう意味では、たぶん、教えて下さった内容ほどに、深い問題とはとらえていなかったと思います。ただ単に印象的であったというだけで。もし深くとらえていたとしたらもうちょっと、その後何らか、そういう問題に興味があったかもしれないですが、未だに特別、フィリピンの人たちの生活に興味を持っているわけではないので、印象はあるけれど、自分への影響を与えたっていうほどではないと思います。間接的というか、日本とは違う世界があるとか、そこには違う人が住んでいるんだっていう、断片的で基礎的なレベルかもしれないですね。それは教科書を使って教えるだけじゃなくて、ご自分がフィリピンに行かれた写真のOHPを使われたり、プリントを配られた

りすると、同じフィリピンのことを言われるにしても、受け取り方は違いますよね。」

聞き取りをした1人、K.Aさんの夫はファクシミリを製造する多国籍企業に勤務し、香港郊外の工場に頻繁に出張する機会があるという。K.Aさんには、夫が多国籍企業に勤務しているという立場から『バナナ』をどう考えるかをうかがってみた。

— バナナの授業は印象に残っていらっしやいますか。

K.A「ええ、それはもう。大津先生イコール・バナナという感じでしたから。バナナって安くて当たり前のものですよね。そのバックグラウンド、消費者の手に届くまでを勉強して、ものすごくショッキングでした。スライドを見せていただいて、すごくショックを受けました。全然考えてもみませんでしたから。ビニール手袋も買えないのにすごい農薬を使って、お金がなくて苦しんでいる人がろくな賃金ももらえなくて、それで私たちのところにこんなに安いバナナがあるんだよと言われてショッキングでしたね。大津先生の授業を受けるまでは別に知りたいとは思っていませんでした。大津先生の授業ではバナナが例としてあがりましてけど、そういうことが裏側であるっていうことに気づいたのが大津先生の授業だったということですね。

うちの主人がファックスを創っているエンジニアなんですけど、最近、中国の工場へ行く機会も多くて、中国の、すごくまじめな女の子たち、それこそ14～15歳ぐらいの女の子たちが1日10何時間、工場て細かい作業を朝から晩までやって、月に五千円っていったかなあ。現地ではそれはすごい収入なんですよね。それをやらせてすごい安いファックスがつくれるっていうことを聞いたりしてます。

— つまりバナナの時とは逆の立場から問題をご覧になったわけですね。労働者の側と企業の

側、両方の論理を見た上で、こうした経済格差をどう考えたよとお考えですか。

K.A「たぶん授業の中でも、じゃあ、どうしたらよいかということの問題になったと思います。私は答えが分からなかったですけど。主人がやっている仕事に関しては、需要と供給が合っているということで、労働条件も、労働時間は長いですがそれに見合った賃金を与えているっていうことで、それはそれでよいかと思います。」

— でもフィリピンのバナナ農園の場合でも、基本的な構図は同じなんじゃないですか。

K.A「私も、それが絶対にダメだとは思わないですが、どうしたらいいんだろうになってしまいますね。社会科の授業っていうのは、そのもの自体が将来役に立つというよりも、それから自分がいろんなことを感じられるようになればいいと思うんですよ。だから取り上げられるのは例であって…。」

— 今、一生活者としてお考えがあれば聞かせていただきたいのですが…。

K.A「難しいですね。あまりふだん、考えていないので…。ただやはり日本が明治以来、がんばったからここまで来たんで、それなりに得るものは得ないとおかしいと思うんです。やたらと長く働くことばかりがいいとは思いませんが…。」

7. 総括—多国籍企業の取材によってより立体的なドラマ構成を

大津は『一本のバナナ』以後、『国際理解教育』(1992年)・『グローバルな総合学習の教材開発』(1997年)という二著を出版し、大津自身、国際理解教育を『バナナ』の地点からさらに発展させようと模索している。そうした展開は大津が高校教育の現場にいた頃から続いており、その結果、元生徒たちにとって印象に残っている授業は『バナナ』にとどまらず、「貿易ゲーム」「死刑制度は是非か」などに広がっている。

そうした展開によって、たとえば M.T さんのように、まさに水を得た魚の如く大津の提示した世界に積極的に参加し羽ばたきつつある生徒も現れたのである。

しかしそうした点を踏まえた上でなお、やや意外だったのは、『バナナ』の授業の、全国の社会科教師たちに与えた衝撃にくらべて、元生徒たちへのインパクトがそれほど強烈ではなかったという印象だ。実は大津自身も『バナナ』が、「動いているのは授業者の私だけで、学習者である生徒たちは教室でじっとしたままではないか」と述べ、自身の国際理解教育における飛躍のきっかけとはなったが、授業としてはある種の弱さをもっていると感じていた。今回の聞き取りで私が感じた印象はそうした大津の反省と照応するものだ。そして大津は「生徒自身が発見し、探求していく」こと、内容研究から方法研究へという方向性をめざしている。しかしこうした方向性は妥当だろうか。

すでに別の機会でも述べたが、私は、教室風景の描写による授業区分にはほとんど意味はないと考えている。チョーク・アンド・トークの授業であっても、学習者の魂を震撼させる時もあるれば、逆に窒息させる場合もある。獲得型・探求型の授業にも同じことが言える。学習者が対象世界に夢中になって調査学習に取り組んでいる場合もあるれば、成績向上のためだったり教室内の政治力学によるという場合もあるだろう。もちろん多様な授業形態の追求は大いに評価すべきなのだが、『バナナ』において「生徒たちが教室でじっとしたまま」であっても、それはただちにこの授業の限界を意味しないのではないか。問題はもっと別の点にあるのではないだろうか。

このことは私たちが映画や演劇を観ることを想起してみればよくわかる。私たちは劇場や映画館で、別に能動的に何かをするわけではなく、ただ数時間、じっと座っているだけである。にもかかわらずそれが時として忘れられない経験となるのは、眼前にドラマがあるからだ。物

語りにおいてドラマが成立するためには、アクターたちがそれぞれ、譲ることのできない切実な動機をかえながら激しく衝突しなければならない。これが当事者のうち片方だけが切実で、もう片方は単なる欲望(貨幣や性)だとしたら真のドラマとは言えない。善玉と悪玉の区別がはっきりしていて、観客の葛藤を挑発することはできない。生徒にとって意味がある教材には、そういう葛藤を挑発できるようなドラマを含んでいるかどうかが問われるのであって、教室風景、授業形態は二義的なものであろう。

私はむしろ『バナナ』自体にもう少し掘り下げるべき課題が残っていると考える。

第一に、バナナという商品がもつ幻想性が遞減しつつある点である。鶴見良行の『バナナと日本人』に驚嘆したのは、やはり「高価で、病気の時にしか食べさせてもらえない」バナナを知っている世代であろう。この世代は、70年代後半、なぜバナナがこんなに安くなったんだろうという疑問は漠然と抱えていた。そういう意味ではバナナの価格の謎解きに出発する心的準備が整っていた。ところがやはり若い世代はそうではあるまい。そういう意味では商品をもっと広げてみる必要がありそうだ。

第二に(これがより本質的な問題なのだが)、『バナナ』の授業では見えないアクターがある。それは他ならない、多国籍企業である。フィリピンに展開したアグリ・ビジネス(アメリカ農事多国籍企業)が、授業で取りあげられたように、労働者に対する農業の影響などについて十分な情報開示をしていなかったり、また長期契約で労働者を緊縛したりするような不当な契約慣行に対しては、私たち消費者も抗議することができるし、そうすべきだろう。しかしそうした不当な契約慣行が多国籍企業のビヘイビアの主要な側面だと断定するのは難しい。もしそれが多国籍企業の本質だとするならば、例えばシンガポールのように、ほとんどの新規投資を外資(日米欧の多国籍企業のシンガポール投資)に依存しながら、アジアで日本に次ぐ国民

所得（産油国をのぞく）を達成したような事例を説明できない。投資先にまったく利益をもたらさない投資は、長期的に見れば治安面などのカントリーリスクを増大させ、企業にとっても決して有利とは言えないだろう。

私は、『バナナ』の授業をさらに発展させるためには、授業形態の多様化を図るという方向性よりも、もう一つの主役である多国籍企業についてフィリピン労働者に対して行ったような

調査・取材を行い、双方の切実性とその葛藤を描くことでドラマ性を成立させることだと考える。そうしたより本質的でより深刻な葛藤に触れることによってこそ、多国籍企業と民衆の関係をリアルに見て行こうとする姿勢が学習者の中に培われるのではないだろうか。もちろんそうした教材研究の課題は大津のみに期すべきことではなく、日本の国際理解教育にかかわるすべての研究者・教師の仕事であろう。